

中日ドラゴンズ新社長に広告出身の吉川克也氏

「選手が集中できる環境づくりを」

地域に根差し、愛されて今年創立85年を迎える歴史と伝統の「中日ドラゴンズ」（オーナー、大島宇一郎中日新聞社社長）。コロナ禍に見舞われ、今年から本拠地も「バンテリンドームナゴヤ」と名前も変わり大きな転換期に差し掛かっているかもしれない。3月25日、中日ドラゴンズ社長に就任した吉川克也さん（65）は「選手が野球に集中できる環境づくりをしていきたい」と力を込める。（聞き手は塚本隆編集長・4月12日取材）

塚本 就任おめでとうございます。

吉川 大変な状況の中で引き受けたなあ、というのが実感です。大島オーナーから「ドラゴンズの社長をやってほしい」と言われたときは、耳を疑いました。歴史と伝統ある球団の顔役に自分になるとは考えも及ばず、なかなか受け止めきれなかったのですが、1時間ほどのやり取りの中でオーナーに背中を押され、「どこまでできるか分かりませんが」と答えた次第。「引き受けます」とは言えませんでした（笑）。就任の1カ月前のことで、正式発表もプロ野球開幕直前でした。

——広告局のご出身ですね。

吉川 中日新聞社で広告をずっとやってきて東京も20年くらい経験し、その後子会社に4年10カ月。基本は広告中心に仕事をしてきました。一方、中日ドラゴンズは球団・選手などのコンテンツをベースにした興行がメインの会社。今までの仕事とは全く違うので不安はあります。これまでの経験がどこまで生かせるかも分かりません。

また、新型コロナの影響は、3年はかかるとみえています。来年までは続く。どうやって立て直していくか、社員とも話をして少しでも赤字を減らす努力をしています。

——青天の霹靂ですか。

吉川 はい。それにしても、球団社長になって周りの反響の大きさにびっくりしました。いろんな人からお祝いのメールや電話を頂きました。東京時代に関係した方々やあまり付き合い

のなかった学生時代の友人、また北海道や大阪の方々からとか。ドラゴンズの社長は大変な影響力があるなあと思い、責任の大きさを改めて感じました。良い意味でプレッシャーとして受け止め、励んでいきたいと思っています。

①経営体質変えたい

——今後の経営をどう取り組みますか？

吉川 会社の収入バランスを見ると、6割が入場料。残りが放映権料やグッズ、協賛広告など。ポートフォリオ的に（ひとまとめに鞆に入れた成果として）言うと、偏ったバランスを変えて、一つがダメでも大丈夫なように経営体質を変えたいと思っています。球場との一体経営をしているソフトバンクや横浜スタジアムを買ったDeNAは野球の入場料収入は3割くらいとなるなど、他球団も知恵を絞っている。ドラゴンズも経営の体質転換を図らないとうまく回って行かないと思います。

一方、現実的には、広告の経験から協賛企業の獲得を含めネットワークをどれだけ活用できるか。また、ファンにはもっとドラゴンズに興味を持ってもらいたいと思っています。10年リーグ優勝していないので厳しいですが、ドラゴンズはこの地に根差している。それを活かす方途を考えていく。地域の宝物ですよ。それを盛り上げていって収入に繋げていけたら、と思っています。

——コロナ禍対策は？

吉川 基本はNPB（日本野球機構）の感染